

留学生別科における支援者の学びと役割

— 留学生SAと別科生への調査から —

Learning and role of supporters in Global Study Center

— From a survey of international student assistants and GSC students —

国際・教養教育センター

安原 凜

YASUHARA, Rin

Center for International and Liberal Arts Education

要旨：本研究では留学生SAが別科生への支援を通じて得た気づきや学び、自身の変化と、別科生が留学生SAのどのような支援が役に立ったと感じているのかを調査した。その結果、多くの留学生SAは、「コミュニケーション能力」「教え方のスキル」「日本語の学習意欲」「説明力」などが向上したと感じていた。また「個人差を考慮」することの重要性に気付いた者も多かった。一方で、「通訳」に困難を感じた留学生SAがいたことから、教員側がその点に配慮する必要があるだろう。さらに、別科生は留学生SAの「通訳・説明」「経験や体験の共有」「学習サポート」「質問対応」が役に立ったと答えており、留学生SAは教員にはできない役割を担っていることがわかった。

Abstract：In this study, the awareness and learning, their own changes gained by the international student assistants through the support for GSC students. I investigated what kind of support the international student assistants felt useful for GSC students. As a result, many assistants of International students feel improved “communication skills”, “teaching skills”, “motivation to learn Japanese”, “explanatory skills”, etc. Many international students also realized the importance of “considering individual differences.” On the other hand, there was an assistant for international student who found it difficult to “interpret”, so it is necessary for the faculty members to take this into consideration when speaking. For international students, the “interpretation, and explanation”, “sharing of experiences”, “learning support”, and “answer to the question” of the international student assistants are useful. It was found that the assistants for international students has an indispensable role that teachers do not have.

キーワード：留学生スチューデント・アシスタント (SA)、支援者の学び、支援者の役割、日本語初級学習者

1. はじめに

令和3年の中央教育審議会の答申『『令和の日本語学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』によると、2020年代を通じて実現を目指す新しい時代を見据えた学校教育の姿として、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない個別最適な学びの実現や、その学びを支えるための質の高い教育活動を実施可能とする環境の整備の必要性を示した。その

上で、このような教育を実現していくためにこれまで以上に子供の成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することが求められている。「個に応じた指導」を実現するためには、教師の力だけでは難しく、教師を補助する支援者の育成が必要となる。多くの大学では、教師の教育補助業務を行わせるために、TA（ティーチング・アシスタント）もしくはSA（スチューデント・アシスタント）を採用し、その他大阪大学のTF（ティーチング・フェロー）、関西大学の

LA（ラーニング・アシスタント）などを採用している。

環太平洋大学では教育補助業務を行う者として、SA¹を採用している。本学の「スチューデント・アシスタント規定」の第1条には、スチューデント・アシスタント（以下、SAと称す）制度を置いた目的について、「学生に教育補助業務を行わせることにより、学生相互の成長および大学教員の充実を図ることを目的としている。」と記載されている。つまりSAが支援する対象の成長だけでなく、SA自身の成長も求められているのである。この規定に則り、留学生別科では、本学留学生別科を修了した留学生をスチューデント・アシスタントとして、積極的に採用している。その理由は、SA自身の別科での学修経験を生かして、学習者に寄り添った支援やアドバイスができることと、SAが別科生のロールモデルとなり、SAを目標に日本語学習に励むことを期待しているためである。いずれもSAに支援される対象の観点からメリットがあると考えたからだが、それだけでなくSAの活動を通してSA自身にも気づきや学びがあることも期待している。そこで、本研究では留学生SAが別科生（後輩）の支援を通じて、どのような気づきや学び、自身の変化を感じているのかを調査する。さらに支援の対象者である別科生は留学生SA（先輩）のどのような支援が役に立ったと感じているのかを調査し、報告する。最後に、留学生SAの役割について考察する。

2. 先行研究

ティーチング・アシスタントに関する研究の多くは日本人を対象にしたものである。支援の対象に留学生を含んだ調査に、義永・潘（2019）がある。義永・潘（2019）では、アンケート及びインタビュー調査を通して、附属図書館ラーニングサポーターの活動の現状およびラーニングサポーター自身の学修支援を通じた学びを報告している。調査の結果、ラーニングサポーターは、主にスキルや態度面での自己の変化や成長、具体的には「コミュニケーション能力の向上」「学習・研究に対する姿勢の変化」「積極性・主体性の向上」「LSとしての自覚の向上」を認識していた。また留学生に対する支援を通じて、「コミュニケーション能力の向上」「視野や態度の変化」「日本語に対する理解の深まり」「学習意欲の向上」を感じていることが明らかになった。また本研究と同じく支援する側も支援される側も留学生である調査に、小森他（2020）

がある。小森他（2020）では、大阪大学短期留学日本語日本文化特別プログラム（メイプル・プログラム）の授業におけるTA・TFの役割意識と学びを、アンケート調査を行い、考察している。その結果、2学期間の教育支援活動を通して、TA・TFは自らの立ち位置を変化させ多様な役割を果たすようになること、新しいリーダーシップの発揮のしかたを身に付け実践するようになり、教育指導能力の向上につながっていることがわかった。また彼らの成長の個人差にはカリキュラムに関わる要因と個人的要因が関係していることが示唆されている。

本学留学生別科のSAの主な業務は授業補助ではなく、授業後のテスト返却や宿題の確認、質問対応の時間に、教員と共に入り教員の補助をすることである。加えて対象は初級日本語学習者であるため、先行研究とは異なる知見が得られるのではないかと考える。

3. 別科SAの概要

本学の留学生別科で留学生をSAとして採用するための条件は三つある。SA採用審査前年度における授業の出席率、GPA、日本語力（JLPTN 1以上）²である。以上の条件を満たした学部3～4年生を採用するようにしている。留学生SAの主な業務内容は、週に1～2回設けられている授業後の学習サポートの時間に、教員とともにZoom³に入り、テスト返却や宿題の確認、教員と別科生双方が伝えたいことを通訳することである。その他にテストや宿題で間違えたところを教員の代わりに説明してもらうこともある。自身の経験を生かして学習方法や留学生生活の助言をしたり、お知らせや注意事項の翻訳をしたりすることもある。

4. 調査1

4.1. 調査目的

本調査の目的は、留学生SAが後輩たちの支援を通じて、どのような気づきや学び、自身の変化を感じているのかを調査することである。

4.2. 調査対象者と手続き

本調査は、留学生SA 6名（別科春学期に従事した4名と、秋学期に従事した2名）を対象に、それぞれの学期終了後の2021年3月と8月に行ったものである。

表1 留学生SAの属性

	学年	国籍	従事した学期	別科SA歴	資格
SA1	3年生	中国	2020 秋学期	2回目	N1
SA2	2年生	中国	2020 秋学期	1回目	N2
SA3	3年生	ベトナム	2020 秋学期	1回目	N1
SA4	3年生	ベトナム	2020 秋学期	1回目	N1
SA5	4年生	ベトナム	2021 春学期	2回目	N1
SA6	3年生	ベトナム	2021 春学期	1回目	N1

選択項目と自由記述項目のGoogle Formアンケートを実施し、全て日本語で回答してもらった。アンケートの結果をもとに、後日、日本語でフォローアップインタビューを実施した。インタビューの所要時間は1人30分程度である。内容は調査協力者の承諾を得て録音し、文字化した。さらに分析の際には、筆者の授業記録も参考資料として適宜参照した。アンケート項目は義永・潘（2019）を参考にし、表2のように設定した。

表2 留学生SAに対するアンケートの調査項目

	質問内容	回答形式
1	SAを始めた理由	複数選択可能
2	SAの活動を通して感じたこと	5件法
3	SAの活動で楽しかったこと、やりがい	自由記述
4	SAの活動で大変だったこと、難しかったこと	
5	SAの活動で学んだこと、気づいたこと	
6	SAの活動を通じた変化、成長	
7	SAの活動以外に別科生にサポートしたこと	

自由記述の回答はオープンコーディング⁴の手法を用いて分析した。以上の調査は全て事前に紙面で調査対象者に承諾を得た上で行った。

4.3. 調査結果

4.3.1 SAを始めた理由

SAをしようと思った理由を選択肢の中から複数選択可として選んでもらった。

SAを始めた理由として最も多かったものは、「自分の将来に役に立つと思ったから」と「自分の勉強にな

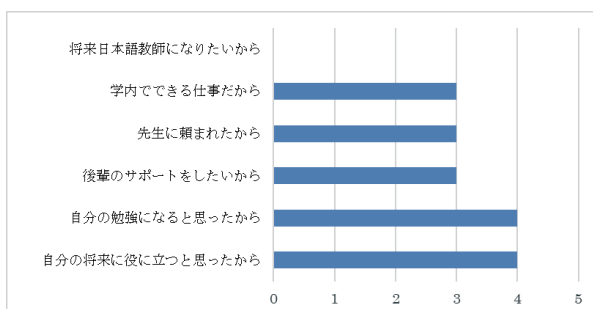


図1 SAを始めた理由

ると思ったから」という項目で、6名中4名（67%）の学生が選択していた。次が「後輩のサポートをしたから」「先生に頼まれたから」「学内でできる仕事だから」という項目で6名中3名（50%）の学生が選択していた。

SAの時給は他の場所で働いて得られる時給と比較すると高いとは言えないため、SAに係る時間を他のアルバイトに使ったほうが効率よく働くことができる。したがって、SAの活動が自身の将来に活かせる、自己研鑽を積みたい、誰かのためになることに喜びを感じられる者こそSAに向いているといえるのかもしれない。教員への期待に応えたいという思い、学内でできる利便性というのもSAの仕事の魅力なのだろう。残念ながら将来日本語教師を目指している学生はいなかったが、反対に言うとは日本語教師以外の職業を目指している者にもSAの活動は魅力があると捉えられる。

4.3.2 SAの活動を通して感じたこと

SAの活動を通して感じたことをそれぞれの項目ごとに「とてもそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の5段階の選択肢から最も適切だと思うものを選んでもらった。

表3 SAの活動を通して感じたこと

	← 全然そう思わない 1 2 3 4 5 → とてもそう思う				
日本語力の向上	0	0	0	2 (33.3%)	4 (66.7%)
日本語に関する知識の向上	0	0	1 (16.7%)	3 (50%)	2 (33.3%)
コミュニケーション能力の向上	0	0	0	1 (16.7%)	5 (83.3%)
教え方のスキルの向上	0	0	0	1 (16.7%)	5 (83.3%)
日本語力の不足	1 (16.7%)	0	2 (33.3%)	3 (50%)	0
日本語に関する知識の不足	0	0	4 (66.7%)	2 (33.3%)	0
自分ももっと日本語を勉強しなければならない	0	0	0	2 (33.3%)	4 (66.7%)
後輩と接するのは楽しい	0	0	1 (16.7%)	2 (33.3%)	3 (50%)
自分の将来に役に立つと思う	0	0	0	2 (33.3%)	4 (66.7%)
自分のサポートは後輩の役に立っていると思う	0	0	1 (16.7%)	2 (33.3%)	3 (50%)

「コミュニケーション能力の向上」と「教え方のスキルの向上」を6名中5名（83.3%）が強く感じており、「日本語力の向上」、「自分ももっと日本語を勉強しなければならない」、「自分の将来に役に立つと思う」と4名（66.7%）が強く感じていた。回答にばらつきがあったのが、「日本語に関する知識の向上」「日本語力の不足」「後輩と接するのは楽しい」「自分のサポートは後輩の役に立っていると思う」である。

フォローアップインタビューの際に、回答の理由を聞いたところ、「コミュニケーション能力の向上」を感じた理由は、「通訳の際に先生や後輩の言いたいことの整理の仕方を鍛えることができた」「他人と話すのが得意じゃなかったが、いろいろな人と話せるよう

になった」からだった。「教え方のスキルの向上」は、「別科生にうまく伝えられなかったときは表情を見るとわかる。彼らの表情を見ながら、説明の仕方を変えることができるようになった」「別科生が間違えるところは自分が過去におかしたミスと同じだった。自分が間違えやすいところに気を付けて、正確に知識を教えられるようになった」からであった。「自分の将来に役に立つと思う」と感じた理由は、「就職活動の際に履歴書に書ける、就職活動の準備に役に立つと思った」「コミュニケーション能力や他の人の意見をまとめて伝える力や日本語の言葉や文法の意味を分かりやすく説明する力は将来に役に立つと思う」からだった。「日本語力の向上」を感じた理由は、「最初は先生の話聞くので精一杯で通訳する内容を忘れてしまうこともあったが、だんだんメモをしながら聞いて、伝えられるようになった」から、「自分ももっと日本語を勉強しなければならない」と感じた理由は、「日本語の基礎の部分を書いているところを復習できて、正しい日本語が話せるようにならなければならないと感じた」からだった。

一方で「日本語力の不足」に「全然そう思わない」と回答した学生は、初級の日本語学習者を相手にした通訳だったので、日本語力の不足は感じなかったそう。サポートの対象が初級日本語学習者だったので、教員もティーチャー・トークでできる限り既習の語彙文法を使用し話すようにしている。このことが、「日本語力の不足」や「日本語に関する知識の不足」を強く感じたSAが一人もいなかったことに少なからず影響している可能性が考えられる。「後輩と接するのは楽しい」と感じた理由は、「新しい人と出会いがあって面白い」「ガンダムや日本の面白いところの話などで盛り上がって楽しかった」などだった。「自分のサポートは後輩の役に立っていると思う」一方で、「自分たちのときは通訳がいなかった。先生と直接やり取りすることが多かった。通訳なしで頑張っ自分理解するほうが日本語の勉強にいい」という考えもあった。

留学生SAたちはSAの活動を通して、自身の能力の向上を実感する一方で、日本語の知識の欠如を実感し、それが日本語の学習意欲を向上させていることが窺える。また、留学生SAの中には、自身のサポートが、別科生が教員と直接意味交渉する機会を奪っているのではないかという迷いや葛藤を抱えている者がいることもわかった。

4.3.3 SAの活動で楽しかったこと、やりがい

表4 SAの活動で楽しかったこと、やりがい

後輩の役に立つ	後輩の学修成果への貢献
	自身の説明を通して後輩の理解が深まったこと
	後輩との練習
	後輩のサポート
	後輩の成長への貢献
自身の役に立つ	日本語使用の機会
	通訳の経験
自身の過去を思い出す	自身の過去を思い出す

自由記述部分を分析したところ、SAの活動で楽しかったこと、やりがいを感じたことに対する回答は、「後輩の役に立つ」ことが最も多く、「後輩の学修成果への貢献」「自身の説明を通して後輩の理解が深まったこと」「後輩との面接練習のとき日本語で後輩と会話をしたこと」「後輩の成長への貢献」に、やりがいや達成感を感じていた。またそれぞれ一人ではあるが、「日本語使用の機会や通訳の経験などが自身の役に立つ」「自身の過去を思い出す」という回答も得られた。

留学生SAたちがSAの活動を通して最もやりがいや達成感を感じるのは、自身のサポートが、自分以外の人の役に立つことであり、それが自分自身の後輩であることに、喜びを感じていることがわかった。次に、SAの活動により自身の能力の向上を感じた時に高揚感が高まるようだ。

4.3.4 SAの活動で大変だったこと、難しかったこと

表5 SAの活動で大変だったこと、難しかったこと

通訳	通訳の困難点
説明	説明の困難点
	文法説明の困難点
後輩への接し方	やる気のない後輩への対応

SAの活動で大変だったこと、難しかったことに対する回答は、最も多くの留学生SAが「通訳」が難しかったと感じており、「先生の言った通りに通訳できているか」「お互いの言いたいことを正しく伝えられたか」「感情も伝えられたか」「後輩に100%通じているか」「後輩の言いたいことを理解すること」といった点に不安を感じていた。その次が「説明」で、「問題を分かりやすく説明すること」「日本語の文法を母語で説明すること」に困難を感じていた。さらに1名

だが、「やる気がない後輩への接し方」に苦勞したという回答も得られた。

通訳をするためには、互いの言いたいことを汲み取って母語や日本語で正確に伝える能力が必要となる。わかりやすく説明するためには、ただ自分の知識を伝えるだけでなく、相手の理解度に合わせて説明の仕方を変える必要がある。いずれも経験や訓練が必要なスキルであるため、今後はこの点に配慮して、留学生SAにサポートを依頼する必要があるだろう。

4.3.5 SAの活動で学んだこと、気づいたこと

表6 SAの活動で学んだこと、気づいたこと

個人差の考慮	レベル差の考慮
	個人差（レベル差、性格）の考慮
分かりやすく伝える方法	クラス人数への配慮
	分かりやすく伝える方法
学習者の日本語学習の問題点	コミュニケーション能力を伸ばす方法
	ベトナム人の日本語学習の問題点
新たな知識の獲得	過去の学習を振り返り、新たな知識を得ること
スキルの向上	コミュニケーション能力の向上
復習の機会	日本語の復習
新たな人間関係の構築	新たな関係の構築

SAの活動で学んだこと、気づいたことという質問に対して最も多かった回答は「個人差の考慮」である。具体的には、「学生のレベルにより、教え方も変わらなければならない」「色々な視点からの見方をとり、説明を考える」「学生個人の性格を理解し、それなりのサポートスタイルに変える」「多人数よりも少人数クラスのほうが学生一人ずつの問題を見つけたり、解決したりしやすい」ことに気づき、学んだと記述している。次に「分かりやすく伝える方法」として、「言いたいことを整理したほうが、伝えたいことはきちんと伝わる」という記述もあった。また「学習者の日本語学習の問題点」として新型コロナウイルスの影響で来日が叶わず、別科生は母国で遠隔授業を受けていたので、「日本に来て、直接話をしないと、コミュニケーション能力を向上させることはできない」、また「ベトナム人留学生はほぼ助詞に問題がある」という記述もあった。他にも「新たな知識の獲得」「コミュニケーションスキルの向上」「初級日本語の復習の機会」、後輩と友達になり「新たな人間関係の構築」に関する記述をした者もいた。

4.3.6 SAの活動を通じた変化、成長

表7 SAの活動を通じた変化、成長

コミュニケーション能力の向上
説明力の向上
教えるスキルの向上
通訳スキルが少し向上
日本語会話力の向上
臨機応変に対応する力の向上

「4.3.2 SAの活動を通して感じたこと」と重複している質問でもあるが、全員がSAの活動を通して、自身の能力が向上したと記述していた。最も多かったのは、「コミュニケーション能力の向上」に関する記述で、「面接を準備したときに、自分の夢がまだはっきりしない、原稿が書けない学生がいました。それをはっきりするために、色々な相談をしないと行けませんので、だんだんコミュニケーション能力も伸びた感じがします。」と記述している。続いて「説明力の向上」と「教えるスキルの向上」「通訳スキルが少し向上」が多く、「説明する時、自分が分かったことだけでなく、例もあげて、一つ丁寧に説明し、フィードバックも聴きながらもっと分かりやすい表現で説明してきました。」と記述している。先ほどSAの活動で最も難しかったのが「通訳」だったが、難しいと感じながらも、自身の「通訳スキルが少し向上した」と成長を感じている。さらに1名ずつではあるが、「日本語会話力の向上」、後輩たちの突発的な質問に「臨機応変に対応する力の向上」と回答するSAもいた。

4.3.7 SAの活動以外に別科生にサポートしたこと

表8 SAの活動以外に別科生にサポートしたこと

学習サポート	授業に関する質問対応
	面接練習
生活サポート	生活に関する質問対応
	買い物
	食事
	引っ越し
	駅周辺の案内

「学習サポート」で最も多かったのは、「経営の授業に関する質問に答える」ことである。別科生たちは経営学部への進学を目指しているため、入学試験対策では経営の授業に関する知識が必要である。別科の教員より実際に経営学部の授業を受講している留学生SA（先輩）からのほうが詳細な情報が得られるため、質問が多かったと考えられる。「生活サポート」では、別科生が来日していない場合は、「日本の生活に関する質問に答えた」ことが多く、来日後は一緒に食事や買い物へ行ったり、駅周辺を案内したりするサポートが多かった。時には引っ越しの手伝いまでしている。留学生SAは特に「生活面」で日本の生活や大学生活について伝える重要な役割を果たしていることが窺える。

5. 調査2

5.1. 調査目的

本調査の目的は、別科生の視点から留学生SA（先輩）のどのような支援が役に立ったと感じているのかを調査することである。

5.2. 調査対象者と手続き

本調査は、別科学習期間終了後の2021年3月と8月に留学生別科に在籍した42名の別科生を対象に行ったものである。42名の内訳はベトナム人留学生が33名で中国人留学生が9名である。別科生に留学生SAのサポートについてGoogle Formアンケートを使用し、調査した。回答は母語での記入も可とし、得られた回答はJLPTN1の資格を取得している留学生に翻訳してもらい、自由記述部分はオープンコーディングの手法を用いて分析した。

表9 別科生に対するアンケートの調査項目

	質問内容	回答形式
1	SAのサポートは役に立ったかどうか	4件法
2	どんなサポートが役に立ったか	自由記述

5.3. 調査結果

5.3.1 SAのサポートは役に立ったかどうか

表10から、別科生全員がSAの存在が「役に立った」

表10 SAのサポートは役に立ったかどうか

項目	人数	割合
とても役に立った	37	86%
役に立った	5	12%

と考えており、42名中37名（86%）が「とても役に立った」と考えていることがわかる。「役に立った」と答えている5名の学生のうち3名が中国人で、いずれも教員が中国人だったため、中国人SAが授業補助に入る必要がなかったからだと考えられる。

5.3.2 どんなサポートが役に立ったか

42名中3名が無記入だったため、39名の自由記述回答を分析対象とする。

表11 役に立ったサポート

通訳・説明 (25 64.1%)	通訳
	説明 自分の言いたいことを伝える
経験や体験の共有 (13 33.3%)	経験や体験の共有
	日本語学習方法の共有
	アドバイス
	勉強や遊びの経験の共有
学習サポート (9 23.1%)	買い物・道案内
	学習サポート
	面接準備のサポート
	面接準備のサポート
質問対応 (6 15.4%)	学習理解の促進
	知識の復習
質問対応	

役に立ったサポートは「通訳・説明（25名、64.1%）」「経験や体験の共有（13名、33.3%）」「学習サポート（9名、23.1%）」「質問対応（6名、15.4%）」の4つに分類できた。具体的に見ると「通訳・説明」については、「先輩がいて、先生のいうことがよく理解できた」「日本語の勉強を始めたばかりなので、もっとわかりやすいように通訳してくれる人が要る」「中国語で説明すると学生の理解に役に立ちます」といった記述が見られ、SAの通訳のおかげで教員の伝えたいことが正確に伝わり、理解が深まっていることが窺える。また、日本語力が高いクラスの学生からは、「話すのはまだよくないから時々先生に日本語で何か説明したいのは難しいので、言いたいことをつたえるには先輩が要る」「先生に言いたいことを説明してくれたから、ありがたい」といった意見も

得られ、比較的日本語力が高い学生たちは聴解力には問題ないが、日本語の産出に困難があり留学生SAのサポートが必要なことがわかる。次に多かった「経験や体験の共有」では、「先輩の経験が私たちの日本語学習にいい糧になります」「先輩が日本語の勉強方法を説明するのはとても役に立ちます」「先輩に聞いて、漢字、作文、読解などの勉強する方法を教えてもらいました」「日本の生活についての知識を説明するのはとても役に立ちます」などの記述があり、学習方法だけでなく自身の日本での生活の経験、日本の大学の生活の経験など生活面でも留学生SAのアドバイスが役に立っていることがわかる。「学習サポート」では、「先輩たちのサポートは勉強に役に立つ」「面接練習時にもサポートしてくれた」「間違ったところを説明したり、直したりしてくれた」などの記述があった。「学習サポート」に関する記述が少なかった理由は、「3. 別科SAの概要」に述べたように、留学生SAの主な仕事は教員の補助で、通訳である。そのため、留学生SAが主体的に学習サポートに関わる時間がなかったからである。最後が「質問対応」で「先輩は先生の前のように緊張しないし、リラックスできます。わからないことがあれば、先輩に聞いても全然平気です。」「疑問や聞きたいことがあったら、熱心に答える。」「私たちの質問に親切に答えたり」「いつも教えてくれる」との記述からもわかるように、先輩はSAの活動時間以外にも別科生の質問に丁寧に対応してくれていることがわかる。SAの活動の最中に別科生が先輩のFacebookを聞いたり、反対にSAの方から別科生たちに連絡先を教えたりして、互いにつながりを求める姿が散見された。

6. 考察

本研究では留学生別科のSA活動を通して、留学生SAがどのような気づきや学び、自身の変化を感じているのか、また支援の対象者である別科生は留学生SAのどのような支援が役に立ったと感じているのかを調査し、報告した。その結果、多くの留学生SAが「コミュニケーション能力の向上」と「教え方のスキルの向上」、さらに「日本語力の向上」、「自分ももっと日本語を勉強しなければならない」といったことから、様々なスキルの向上と日本語力の伸長を感じる一方で日本語力の不足を感じる者もあり、それが日本語の学習意欲の向上にも貢献することがわかった。将来日本語教師を目指していると回答したSAはいなかつ

たが、それでも「自分の将来に役に立つと思う」と答えるSAが多かったことから、SAの活動は、職種に関係なく社会に出て働く際に必要なスキルを高める可能性があることが示唆された。また、SAの活動を通して、別科生の個人差（性格、日本語レベル、考え方）に考慮する必要があることが学べたことは、クラス授業の支援ではなく一人ひとりへの支援ができる時間にSAの活動を依頼していたことによるものだと考えられる。

支援の対象者である別科生たちは全員がSAの支援の必要性を感じており、SAの通訳のおかげで教員の言っていることが理解でき、言いたいことが言えること、母語による説明のおかげで理解が深まることがわかった。また別科での学修経験がある先輩だからこそ伝えられる日本語学習のアドバイス、日本の生活や大学生活の体験を教えてもらえること、いつでも質問できる気軽さが、評価が高い理由だった。このことから、留学生SAは教員にはできない役割を担っていたことがわかる。

一方で、課題も残っている。多くの留学生SAたちがSAの活動の中で通訳や説明に困難を感じていた。中でも通訳については回数を重ねても一部のSAが「少し向上した」と述べるに留まっている。通訳の仕事をするためには、専門の学校でトレーニングを受けることも多く、すぐにできるようになるものではない。したがって、教員側がその点に配慮し、話すスピードや話の内容を整理してから伝える必要がある。さらに留学生SAの一人が話してくれたように、通訳に頼りすぎる余り、別科生のコミュニケーションの機会を奪うことは避けるべきである。そのために教員はできる限り既習の語彙や文法を使用して話し、別科生には理解できなかった箇所は通訳の説明を聞くようにすることと、できる限り日本語で話すように促し、伝わらなかった場合に通訳を頼ったほうがよいと考える。

7. おわりに

多くの留学生SAが、別科生への支援を行う中で、「個人差に配慮することが必要だ」と気づきや学びを得たことは、「はじめに」でも触れた令和3年の中央教育審議会の答申にあった「子供の成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援する」ことができる支援者の育成に貢献できたと考えられる。また、留学生

SAとのやり取りは、教員よりもリラックスでき、母語でやり取りができ理解が深まるため、安原（2020）の自己省察ができる学習者の育成にも役に立つのではないだろうか。今後も留学生別科で「個に応じた指導」を実現するために、留学生SAの学びや役割について考察を続けていきたい。

注

- 1 2019年度にTA（ティーチング・アシスタント）からSA（スチューデント・アシスタント）に名称が変更された。
- 2 規定ではJLPTN 1 以上が望ましいが、該当者がいなかった場合、N2でも可としている。
- 3 新型コロナウイルスの影響により、本学留学生別科では2020年4月よりZoomを用いた遠隔授業を行っている。別科生が来日できた場合はZoomではなく教室に入ることになる。
- 4 オープンコーディングとは、定性的・帰納的なコーディングの一つであり、データの内容に即しながらその内容を要約した小見出しをつける作業である（佐藤，2008）。ここでは、インタビュー観察のデータを内容のまとまりごとに区切り、その内容を要約した短い言葉（コード）を付すと言う順で作業を行った。

謝辞

本調査に協力してくれた別科生及び留学生SAに心より感謝いたします。

参考文献

- 岩崎千晶・久保田賢一・水越敏行（2008）「組織的な教員支援としてのスチューデント・アシスタントの効果と課題」『日本教育工学会論文誌』32, pp.77-80
- 環太平洋大学「スチューデント・アシスタント規定」（平成31年4月1日施行版）
- 小森万里他（2020）「留学生に対する教育支援活動を通じたTA・TFの成長：大学院生の役割意識と学びの観点から」『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』18, pp.1-19
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法－原理・方法・実践』新曜社
- 秦喜美恵・平井達也・堀江未来（2016）「学生ピアリーダーの成長プロセスとその要因分析に関する質的研究－立命館アジア太平洋大学のティーチング・

アシスタントへのインタビューをとおして－」『立命館高等教育研究』16, pp.65-82

中央教育審議会答申（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」【令和3年4月22日更新】

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm（2021年9月1日確認）

安原凜（2020）「学習者オートノミーを育成するコース運営の試み－自己調整学習の自己省察に着目して－」『環太平洋大学研究紀要』第17号, pp.117-122

義永美央子・潘英峰（2019）「学修支援の経験を通じた支援者の学び：図書館ラーニングサポーターの調査から」『大阪大学国際教育交流センター研究論集』23, pp.53-64